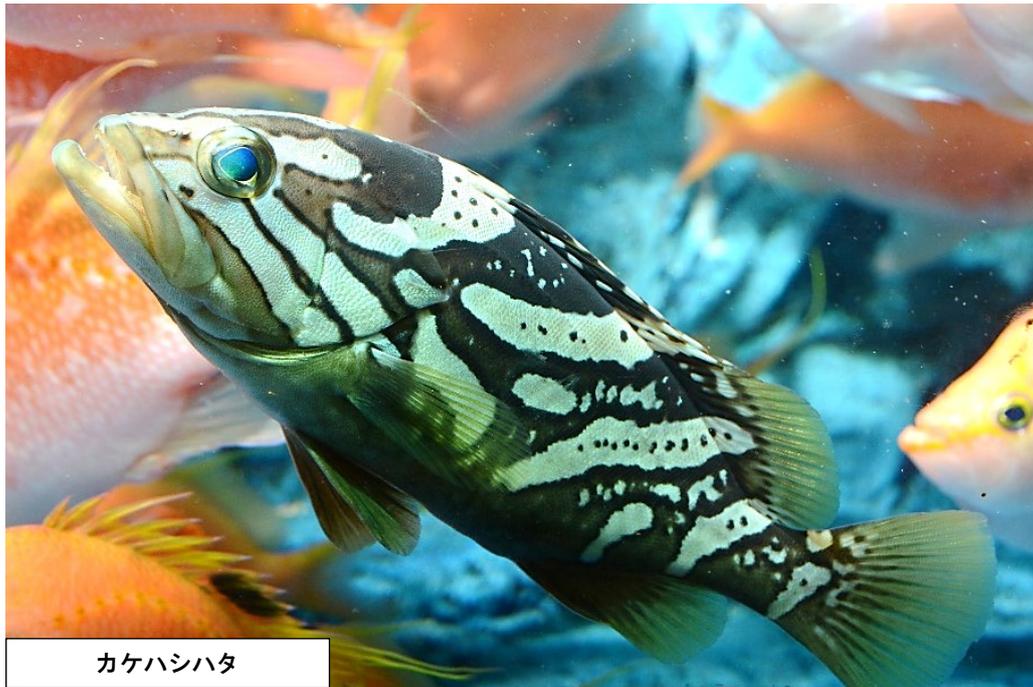


今月の
いいね!

おもしろ模様のカケハシハタ



カケハシハタ

【名前】

カケハシハタ（スズキ目ハタ科）

【すむ場所】

南日本。やや深い岩礁域。

【大きさ】

全長 60cm

【当館で見られる場所】

駿河湾の生きもの

【特ちょう】

面白い模様をした魚で、どこかの芸術家がデザインしたような虫くいの白い帯状の模様が特ちょう的な魚です。

【担当学芸員から一言】

本種の他にもホウキハタとイヤゴハタという似た模様をしたハタがいます。似たようなハタを見かけた際にはぜひ、その種類を調べてみてください！(Y.I)

トピック

変わりコイのぼりーニシキテグリー

当館では毎春、飼育している生き物や恐竜の化石などを変ったコイのぼりとして仕立て、博物館の広場にあげています。今年の変りコイのぼりは、色鮮やかなネズポの仲間の「ニシキテグリー」です。しかし、今年の春は新型コロナウィルスの影響で、臨時休館が長く続き、あげ続けることができませんでした。そのため、6月22日に再開館を迎えてから、子ども達の健やかな成長と一刻も早い事態の終息を願って再びコイのぼりをあげています。モデルのニシキテグリーも元気に水槽を泳いでいます。(S.T)



※天候により展示を急遽中止する場合があります。予めご了承ください。

クジラの骨格標本



ピグミーシロナガスクジラの骨格標本



漂着したアカボウクジラ

海洋科学博物館の2階ではピグミーシロナガスクジラの骨格標本を展示しています。この標本は種類を発表・登録する際の基準となった標本です。全長18.6m、骨の重さだけでも3.5tもあります。クジラ類の骨は端の部分にスポンジのような空間があるのが特徴で、これは水中で自分の体重を支える必要がないためです。しかし、泳ぐために大きな力が加わる尾の部分やエサを海水ごと捕える顎などは骨の作りがしっかりしていて、大きな力に耐えることができるようになっています。

もう一つの大きな特徴は、後ろ足をささえていた骨の一部が小さくなり、体の中に残っていることです。大昔、クジラの祖先は4本足で陸上を歩いていました。その後、水中で生活するようになったため、現在とほぼ同じ体の形になりました。骨の特徴から、かつて後ろ足のあった跡がしっかりと分かります。

2019年9月中旬に静岡市南部の海岸にアカボウクジラが数個体、漂着しました。調査のため解剖が行われ、当館に1個体の骨を運び込み、標本を作るために敷地内の地中に埋めました。自然分解によって肉を除去し、その後、洗浄して全身骨格標本にする予定です。大きなクジラですが、無数の細かい骨もあるため慎重に作業を行わなければなりません。また作業を行った際には、ご報告したいと思います。(S.T)

カスミサクラダイ

今回ご紹介する魚は「カスミサクラダイ」です。その名前を聞いて、すぐに姿形が思い浮かぶ人は研究者かよほどの魚マニアでしょう。それくらい一般的とは言えない魚ですが、オレンジ色の鮮やかな体色が目を引くととてもキレイな魚です。スズキ目ハタ科に属し、大きくても20cmほどの小型の種で、主に南日本の太平洋側に分布し、深場の小石が混じるような砂地にすんでいます。水族館の職員でもお目にかかることが少ない種で、特に生きた姿を見ることはなかなかできません。底引き網や釣りなどで混獲されることもあります。その水深は100mより深くなります。そのため、減圧症などにより生きたまま収集することが大変難しく、当館でも飼育例は多くありません。

昨年末、知り合いの漁師さんから見知らぬ魚が釣れたとの連絡があり引取りに行くと、なんとカスミサクラダイでした。残念ながらその個体は死んでしまいましたが、「次はなんとか生かして!!」とお願いしてみました。するとしばらくして、「この前の魚が生きてるよ」と連絡が入ったため、すぐに港へ。到着して船の上のバケツをのぞくと、そこには泳いでいるカスミサクラダイ! さすがは魚のプロですね。その後も数個体を収集してもらうことができました。現在、それらの個体は、エサを食べて落ち着くまで、予備水槽にて飼育中です。展示までの出番待ちというところですが、近いうちにその美しい姿を皆さんに見ていただけることを願っています。(K.Y)



カスミサクラダイ



水槽を泳ぐカスミサクラダイ

※生物の状況により展示を急遽中止する場合があります。予めご了承ください。